探訪記録

弥生町の小田井堰立札等

― 郷土碑文巡り (七) ―

会員　山　本　保
（佐伯市地区）

弥生町小田（国道十号線、大分バスのりば小田付近）の番匠川沿いに、次のような立札が建てられています。

河川名	一級河川番匠川
許可年月日	昭和51年7月14日
許可番号	建九51水匠第2号
許可期限	昭和60年3月13日
許可権者名	九州地方建設局長
水利使用者	小田井堰土地改良区
水利使用の目的	かんがい
かんがい面積	67.6ha
水利使用者事務所	小田井堰土地改良区 TEL(2) 2050
所轄事務所	建設省佐伯工事事務所 TEL(2) 1880

一級河川番匠川の許可権者は九州地方建設局長、所轄は建設省佐伯工事事務所になっています。かんがい（灌漑）とは、水路を作って、田畑に必要な水を引き、土地をうるおすことです。

小田井堰の鉄製水門には、小田頭首工移設築工事、昭和三十九年九月竣工、施工者高山綜合工業株式会社の文字が刻みこまれています。水門には、コンクリート製の八つの石段が特設され、そのいただきには、小さな水神様（石祠）が安置されています。

（右側面文字）
昭和四十四年六月移転　岡部

（正面文字）
一金拾五円寄付　高橋寿吉
小田井路世話人名　井路総代　高橋寿吉
本村（上野村）　高　水富蔵　脇　廣瀬岩五郎
上岡　大崎源太郎　古市　木許吉五郎
小田　加藤利作　昭和四年四月建之

（左側面文字）
石工　川又　工藤勝治

水神様は、上野村小田・鶴岡村脇・上岡・古市の小田井路世話人、井路総代によって、昭和四年四月に建立されましたが、昭和三十九年九月の小田頭首工移転改築後、昭和四十四年六月岡部さんのお骨折りによって、現在地に移動されました。付近の河川敷は、見事に整備され、芝生も植えられて、番匠スポーツ公園（弥生町）に利用されています。

なお、スポーツ公園内には、軟式野球場、ソフトボール練習場、陸上競技場等の施設設備が整備され、弥生町民レクリエーションの最適の場所となっています。

近頃、大分十号番匠大橋拡幅下部工事（道路工事）や、小田地区頭渠工事（防災工事）が、河村建設・谷川建設等によって押し進められ、小田井堰の水路が整備中でしたが、いずれも建設省佐伯工事事務所の指導によるものです。

さかのぼって元禄四年（一六九一年）三月十七日、佐伯藩

主第五代毛利駿河守高久家来、小林九左衛門と下野村へ現在佐伯市鶴岡）大庄屋梁矢治左衛門時真によって、小田井堰は、千辛万苦の末完成しました。

旧鶴岡地方は、広い耕地に恵まれながら、灌水（農業用水）不便で、水田が少なかった。畑地を水田に改良するために、井堰が設けられました。

佐伯市を西に五キロ半、弥生町大字小田付近を流れる番匠川に、長い横堰を築いて、更に、佐伯市大字鶴望に至る延長四千四百余メートルの水路を造りました。現在、国道一〇号線、二一七号線に沿って、小田井路が改修されています。

元禄四年以降、大庄屋梁矢治左衛門時真、梁矢治左衛門睦時、そして文政九年佐伯藩主第十代毛利出雲守高翰の頃、広瀬弥三兵衛等によって、大改良が続行されています。

明治二十三年にも大修理を試みています。

「……鶴岡村ニ談判、相調、費用ヲ分担ス。其ノ証トシテ上野村長、議員、大字小田伍長、世話掛、井手守等記名ス。

上野村長出納徳佐、議員兼伍長加藤五年治、議員山口金三郎、世話掛石井弥五六、加藤吉蔵、加藤銀四郎、井手守加藤澄夫

鶴岡村伍長　今山幸太郎、伊達松治、廣瀬金太、馬治楼一、大鶴広三、高治亀三、伊達今朝吉、藤田小八、高治保五郎、高治森三郎、浜倉松三、井手守佐藤勇、広瀬元五郎、仲尾慶三。工事請負人袋野慶三、石工今山権、」

と刻み込まれている記念碑（石碑）が、国道二一七号線大分バスのりば番匠付近に建立されていますが、苔むして、まだ磨滅され、文字も読みづらくなっています。

石碑を眺めるたびに小田井堰の維持管理に、いかに先人が努力されているかがうかがわれ、そこには弥生町と佐伯市の強い結びつきを感得することができます。

鶴岡地方繁栄の基礎は、小田井堰に負うところが甚大だといっても過言ではありません。

（おわり）

郷土史話

中の谷こそ泣く谷よ

会員　中村由子（弥生町江良）

生存していれば、今年九十八歳になる母から、私が幼ない頃、幾度か聞かされた話である。

まだ、汽車や自動車のない時であった。灯はランプかローソクといった時代で、どこへ行くにも、徒歩になるのは、自分の足であった。その頃は、医者に診てもらうのは末期の臨症で、それとても間に合えば良い方であった。

そんな時分の話である。どういう経路でか、大分へ入院していた病人が死んだという。

さて、この死人を、弥生まで連れて帰らねばならぬことになった。駕籠が十人程、徒歩で大分へと向かった。とにかく、中の谷峠を夜っぴいて、越えたものであろう。

行きはそれでもよかったが、帰りは戸板に死人を載せての道中である。替るがわるかつぎながら、ふもとまで来た。

これからが中の谷峠である。山道はうっそうと草木が